

龍 灯

第 1 号

発行所 大阪市史跡 龍溪禪師墓所
 霊亀山 九島禪院
 〒550 大阪市西区本田3丁目4-18
 ☎06-583-2725
 発行人 住職 奥田啓知(智證)

脳死と仏教

静かに死なせてほしい

仏教では、私の寿命には限りがないから、無量寿といえます。ひとは定命(じょうみやう)で量が定まっています。寿(じゅいのち) 湊(なん) 体温(じゅ(じき) 意識) といひ、死にのぞむと、湊・識が肉体を離れ、寿が尽きるのだそうです。

一方、医学では、心臓が止まったとき(心臓死)に、脳も自然と活動を停止し死亡に至るとされています。昨今、「脳死」といって、心臓は動いているのに脳が活動を停止し、脳が永久に機能を失った状態(不可逆的機能消失)をもって死と認定しようという動きがあります。いわゆる「脳死」に関する論議ですが、「脳死」の問題を手掛かりに仏教の考え方、仏教のあり方を考えてみたいと思います。

読売新聞の日曜版に「まんだら人生論」(ひろさちあ著)に次のような記事がありました。

四人の男が旅をしていた。道にライオンの骨が散らばっている。一人の男が骨を拾い集めてライオンの骨格を作り上げた。

「次は、おれ様の出番だ」と、もう一人の男がそのライオンに肉をつけ、皮を着せた。「さてそれでは、わしはこのライオンに命を吹き込んでやろう」と、第三の男が言った。第四の男は第三の男をいさめる。そんな馬鹿なことをしてはいけない。

しかし、彼は耳をかそうとしな

い。あわてて、第四の男は高い木の上に登った。第三の男が、ライオンに生命を吹き込んだ。生き返ったライオンは、三人の男たちを食ってしまった。第四

の男だけが、木の上で難をまぬがれた。

この話の三人の男は「科学技術」を象徴し、第四の男が「宗教」を象徴しているように思うのです。宗教を欠いた科学技術の独走は、ときには恐ろしい結果をまねいてしまう。そんなことを、この話は教えているように思えるのです。

例えば、臓器移植です。「脳死」を認めることによって、心臓と肝臓の移植が可能になり、多くの人命が救われる。そのこと自体はたいへん喜ばしいことですが、臓器移植をするためには、「脳死」を認めてまだ呼吸をしている人間を「死者」とし



